
大人勇者と子供魔王

taktoto

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大人勇者と子供魔王

【Nコード】

N4271H

【作者名】

takto to

【あらすじ】

毎日をだらだらと過ごしていた男は、駅のトイレで異次元へ!?
ダラリーマンの物語

プロローグ

―朝。

通勤ラッシュに身を揺られ。

―昼。

ウザい上司にけなされて。

―夜。

コンビニ弁当で腹を満たす。

「あゝ…疲れた。」

気だるそうな声を上げるこの男。
よこたこうへい

横田公平、28歳。

彼女無し、貯金無し、趣味はパチンコ。

夢も無く、大した目的も無く、淡々と生きてるこの男。
特に珍しいタイプでは無い。

良くある「人生たのしけりゃいいじゃん？」
そういうったタイプの人間だ。

今日も横田は一日を終えた。
特に変わったことも無く、特に何かをする訳でもなく。

当たり前の一日は、当たり前前に終わりを迎えた。

「そろそろ彼女ほしー…」

横田はそう呟くと、いつも通りエロ本を読みだした。

パラパラとページをめくり、読み終えたらビールを飲む。

毎日の生活リズムはこんなものである。

当たり前な毎日は当たり前前に続き、

横田の人生に何ら変化はないまま過ぎていく。

『何がしたい？』

そう問われて答えられる人間はごく一部。

無目的に大人になった人間に、そんな質問に答えられるものはない。

横田の様な人間は、

「何でも出来るが何にも出来ない。」

要するに器用貧乏だ。

対して苦勞もせずに生きて行けるから、
努力などしたことも無い。

横田はビール飲みほすと、そのまま眠りについた。
小汚い布団にくるまり、スヤスヤと眠りにつく。

「おやすみー…」

この年で一人だと、誰も居なくても声が出る。

寂しい男の一日は、こうして淡々と過ぎていく。

――翌朝

携帯のアラームで目が覚めると、

横田は気だるげにスーツへと気がえる。

駅へ向かい、いつもの電車にギリギリで飛び込んだ。

「ふう……後3分は寝れたな……」

こういった計算では非常に頭が回る。

これもまた、器用貧乏の特徴である。

乗車率は8割程度。

混んではいるが、まあさしあたってキツイ訳でもない。

吊革に揺られる事20分。

会社近くの駅で電車を降りた。

ふとトイレに行きたくなり、

横田は駅のトイレへと足早に急いだ。

トイレにつくと、「小」の方は全て埋まっていた。

一つ溜息をつくと、仕方なく横田は「大」の扉を開く。

こういう時の他人の視線は、なんとも言えない雰囲気をかもし出す。
いそいそと中に入りドアを閉める。

便器の蓋を開けると、妙に青色に光っていた。

「ブルー○ツトの使い過ぎ？」

一人ギャグをかまし、横田は用を済まそうとした。

その時、便器の水が回り出した。

その速度はどんどん速くなり、横田の目が回る。

「うげー…酔った…」

フラフラと体が揺れ、思わず便器に座りこむ。

ーゲンツ！！

なんだか下から引っ張られる様な感覚。

「おうっ!？」

横田は変な声を上げた。

次第に便器に吸い込まれていく横田。

横田は焦りながら一人声を上げていた。

「ちよっ…!! 待って!! 何これ!？」

尻の半分が吸い込まれている。

横田はバタバタと両手を動かす。

しかし、そんな抵抗も虚しく、体はドンドン吸い込まれていく。

「おおおおおおおおおい！！これ便器だから！！流すところだから！！せめて別の…」

ツツコミを入れた所で、横田の意識はブラックアウトした。
そのまま横田は便器へと吸い込まれていった。

プロローグ（後書き）

サラリーマンファンタジー的な何かです（笑）
ゆっくりと書いて行きます。

第1話：召喚（前書き）

便器に吸い込まれた横田は、異次元へと吸い込まれた。

第1話…召喚

「今宵…勇者が現れる…」

司祭のお告げが国中に広まった。

オルターナ王国は、勇者の出現を今か今かと待ち続けていた。

街の女性の間では、様々な噂が飛び交っていた。

「イケメンらしいよ♪」

「若いんだって♪」

「…」

それぞれが勝手に想像した『勇者像』を胸に、
その時を待ち続けていた。

司祭の一人娘、アンジェもまたその一人。
父のお告げを胸に抱き、勇者の訪れを待つ。

勇者が来れば、世話係として父に任命されるだろう。
期待と不安がアンジェに渦巻いていた。

オルターナ神殿では、勇者を迎える準備が進んでいた。
神殿は街の中心部に有り、様々な儀式を催す神聖な場所。

アンジェも神殿へと向かい、正装に着換える。
ゆったりとした白いローブに、宝石を埋め込まれたティアラ。

銀と金をあしらったブレスレットを身につけ、
魔方阵の前で勇者の訪れを待つ。

月が天高く昇り、世界が歪み始めた。

勇者の訪れに、人々は歓喜の声を上げた。

ーブウンー！！

魔方阵が青く輝き出す。

いよいよ勇者の登場だ。

アンジェは緊張した面持ちで、手を合わせ祈り始める。

鮮やかな光が魔方阵を包み、勇者が登場する。

…はずだった。

人々の目に飛び込んできたものは、

男のお尻らしきものだった。

魔方阵からお尻が出ている。

少し苦しげにバタバタ暴れている。

人々は顔を見合わせ、なんとも言えない光景に言葉を失った。

アンジェもまた言葉を失い、その光景を眺めている。

顔をピクピクと引きつらせ、硬直していた。

「せめて別のものでー！ー！ー！！」

声を上げながら、男が魔方陣からはじき出されてきた。

—ポーン

現れたのは横田公平^{よこしたこうへい}。

横田とアンジェの目が合う。

気まずい沈黙が続く。

沈黙を破る様にアンジェが口を開いた。

「…おっさん…」

少女の口から衝撃の一言を言われた横田は、目を見開いて口をパクパク動かしている。

ようやく横田が声を上げた。

「俺はまだ20代だ…」

人々のため息が神殿中に広まった。
アンジェはその場に倒れ込んだ。

第2話：旅立ち？（前書き）

便器から召喚された横田。状況もよくわからないまま、初めて少女に言われた台詞は：「おっさん」だった…。

第2話：旅立ち？

―この世に復活した魔王を倒す…。

―どうやらそれが俺の役目らしいが、

―この時の俺にはどうでも良かったんだ。

「すっげー納得いかない。」

横田は憤慨していた。

漫画で良くある「召喚」などというもの、
体験出来た事は嬉しかったが…。

未だかつて、便器から召喚された勇者は横田ぐらいだろう。
目の前に座るアンジェに向って愚痴をこぼす。

アンジェは一つ溜息をつくとき、横田に向けて言った。

「はあ…おっ…じゃなくて勇者様。」

「今…おっさんって…」

慌てて訂正したアンジェの言葉尻を捉えた。

反論しようとする横田を流しつつ、アンジェは言葉続ける。

「勇者様は選ばれし者です。魔王を倒して頂かないと…。」

髪の毛を指先でいじりつつ、アンジェは横田に言った。

「…ふむ。なんだか物凄く不本意そうだな。」

横田が鋭く突っ込む。

アンジェは腕をパタパタ振りながら否定する。

「べーつにいいー。」

あからさまにヤル気の無いアンジェ。

さすがの横田も頭に來たらしく、無言で立ち上がった。

「どこ行くんですか？」

「どこだっていいだろ。」

「外は魔物だらけですよー。」

「…」

横田はそのまま座りこんだ。

意志の弱さは折り紙つきである。

「俺はどうすりゃいいんだ？」

横田はアンジェに問いかける。

「だーかーらー。魔王をやっつけて下さいよー。勇者様ー。ふぁいとー♪」

投げやりなアンジェの態度に横田のスイッチが入った。

「…ふむ。決めた。魔王の前に…お前をぶっ殺す！！」

横田は立ち上がると、アンジェに向かいダッシュをかける。
相手は所詮少女。腕力に物を言わせ、大人の力を思い知らせる…。

そんなプランを頭に描き、横田はアンジェにタックルをかける。

「ふんっ…」

アンジェは鼻で笑うと、小さく呪文を呟いた。

突如横田の目の前に、大きな壁が立ちふさがった。

「うおおおおー!？」

ーゴンッ

鈍い音を立て、横田は壁に激突した。
さすがにこの距離では避けなかった。

「ププププ…ダサッ…ププッ…」

アンジェの笑い声が耳に残る。

横田の意識は少しずつ暗くなっていった。

横田はベッドの上で目が覚めた。

傍に居たメイドらしき人が、心配そうにこちらを見ている。

「いててて…」

ぶつけた箇所を抑えながら、横田はゆっくりと起き上った。

「大丈夫ですか!？」

すかさずメイドが声をかける。

「うううっ…」

横田はバランスを崩し、メイドへともたれ掛った。
無論、ワザとである。

鼻の下を伸ばしながら、横田はメイドをマジマジとみている。
その姿はただの変質者であった。

横田に邪まな感情が生まれたその時、
前方より飛来する一つの皿。

—ゴンッ

「ぐあッ!？」

横田はベッドへ倒れ込む。

メイドが振り返ると、そこにはアンジェの姿。

—あの女——!!

心の中で横田は絶叫した。

アンジェはこちらに向いスタスタと歩いてくる。

そして、横田の胸倉を掴み上げ、
罵り始めた。

「最低!! 変態!! おっさん!!」

初めてみたイメージから想像もつかないアンジェの姿。
横田は少しビビりながらも、精一杯反論した。

「なんだよ!! 死んだらどうする!!」

アンジェは「フンっ」と鼻をならすと、
横田を冷めて目で眺めていた。

「あら。メイドさんにデレデレしていたのは誰かしら？」

「お尻まで触ろうとしてたのは…どこの誰かしら？」

アンジェはそう言うと、横田の手をつねる。

横田は冷や汗を流しながら、メイドの方をチラッと見た。

―ズザザザザッ

激しく後ずさりするメイド。

そんな姿にちょっとだけ横田の胸は痛んだ。

そんな光景を見てアンジェは爆笑している。

横田は居てもたってもいられず、部屋を飛び出した。

「クソっ!!!」

全力で屋敷を後にし、街を飛び出した。
走り去る横田を、アンジェは溜息をつきながら眺めていた。

第3話：ホームレス勇者は悪人へ（前書き）

アンジェに馬鹿にされ、町を飛び出す横田。そのいく先には大きな困難が待ち受けていた…？

第3話：ホームレス勇者は悪人へ

「うわあああああー！ー！！」

横田は力の限り叫びながら走った。

滴る汗もお構いなしに、一人街中を駆け抜けていく。

「クソー！ー！ー！ーあの子！ー！！」

その目には少しだけ涙が浮かんでいた。

目一杯街を走り抜けると、街道まで抜け出していた。

ふとアンジェの言葉を思い出す。

「外は魔物で一杯ですよ。」

横田の頬に一筋の冷や汗が流れた。

辺りには何の気配も無い。

横田はアンジェの言葉に後ろ髪引かれながらも、街道を一人進んで行った。

ーガサガサッ

茂みから音がする…。

それは段々と近づき、横田の目の前に現れた。

「キュウ？」

可愛いウサギの姿。

横田はホッと胸を撫で下ろし、目の前のウサギに近づいた。

ウサギが僅かに震えた。

ーメキメキッ

耳に触る音を上げ、ウサギの姿が変わっていく。

横田は恐怖で動く事が出来なかった。

「うわああああ!!」

ようやく声を上げると、すっかりと姿が変わったウサギから、全力で走って逃げだした。

『グウウウガアアアア!!』

ウサギ(?)が遠吠えしながら追いかけてくる。

「ヤバイヨヤバイヨー!!」

どこかで聞いた様な台詞を叫びながら、

横田は全力で逃げる。

ウサギ(?)は走るのが苦手なのか、距離がドンドン開いて行く。
気づけばウサギ(?)の姿は遠くなっていた。

「ハァー…ハァー…」

横田は脇腹を押さえながら、呼吸を整えている。

「何か：スポーツ：ゼエ：やつとけば：ハア：良かった：」

日頃の運動不足がたたり、根こそぎ体力を奪われていた。
街道を繋ぐ橋へと来ると、隠れる様に橋の下へと逃げ込んだ。

「お：ここ：案外快適♪」

壁はひんやりと気持ちよく、小川から爽やかな涼風が吹く。
程良い気温と疲れが、横田を眠りの世界へ誘う。

「スウーッ：スウー：」

横田は深い眠りに着いた。

翌日。流石に固いタイルの上で眠るのも辛い。
そんな理由から、横田はベッドになりそうな物を探していた。

軽く茂みをかき分けると、古びた馬車が捨ててあった。
土台と屋根を持ち帰ると、簡単な家を作った。

「おおー。いいじゃないか！！」

完成した我が家(?)らしきものを眺め、
横田は一人頷いていた。

当面、寝床の心配はいらなさそうだ。
次に探すのは、当然の食糧であった。

こちらに来てからまともに食事を取っていない。

空腹感に襲われ、橋を渡り森へ入る。

頭上には木の実が生っていた。

横田はすかさず木の実の確保に登った。

しかし、登りきると、足元には昨日のウサギの群れがいる。
降りれない状態で横田は木の実を頬張った。

「うまい!!」

空腹感と相まって。格別な美味さを感じた。

そのまま群れが移動するのをひたすら待った。

2日…3日…

待てども待てども、群れは一向に移動する気配がない。

このままでは木の上で暮らす羽目になる。

突然、横田の頭に名案が閃いた。

「…そうだ!ウサギっぽいし…この木の実が目当てかも…」

横田は試しに、木の実を一つウサギ(?)の群れへ放り投げた。

「キュウ〜♪」

可愛らしい声を上げ、木の実をむさぼっている。

横田は木の実を、自分の位置から遠い場所に全力で投げた。

すると、ウサギ(?)の群れはそちらに向かい移動して行く。

すかさず横田は木から降り、全力で寝床へ走って行った。

「さすがに…疲れた。」

横田は寝床に横になると、そのままやすやすと眠りに着いた。

「ううう…!？」

突然横田の腹を、激痛が襲いだした。
どうやら食当たりしたらしい。

「ノノオオオオウ!!」

変な声を上げながら茂みに隠れる。

「オオオウ…♪」

君の悪い声を上げ、横田は茂みから這い出した。
寝床に戻り横になる。

そのまま眠りに着いた。

それから数日。

横田はめぼしい食料を見つけられず、
一人寝床でぐったりとしていた。

「…腹…減った…無理…。」

遠い目をしながら、頭上の橋を眺める。
日中はチラホラと人の足音がするが、

こちらを気にする人もいない。

試しに橋の上に座り込み、
通行人に話しかけるが、皆関わりたくないといった表情で、
横田を避けながら歩いて行く。

当然だろう。

横田の風貌は、最早ホームレスそのもの。

髭は伸び、髪はボサボサ。ヨレヨレの汚れた服。
どうみても勇者ではない。

「何で俺が…こんなめに…うう…。」

横田の目には少しだけ涙が浮かんでいた。
虚しくなり、寢床に戻り息をひそめる。

そんな生活が1ヶ月続いたある日。
限界を超えた横田の頭に、一つのプランが浮かんだ。

「…もう…通行人から奪うしかない…。」

勇者としてあるまじき思考である。

横田に余裕は全く無く、目は逝っている。

遠くから女性の姿が見えた。

「よし…あいつから…ククッ…」

すかさず期の後ろに隠れ、じっと息を潜め待つ。

目の前に女性を通りかかった。

「おらあああああああ！！！」

横田が突進して行く。

「キャアアアア！！！」

女性は驚き戸惑っている。

「お前の荷物をよこせ！！さもないと…」

女性は声を出さずにカクカクと頷くと、手荷物を置きその場を去った。

横田はそれを拾い上げると、一目散に寢床へ向かって駆けて行った。

戦利品を寢床で確かめる。

入っていた物は、パンとミルク、それから少しばかりのお金。それに果物ナイフと、リンゴみたいなものが2つ。

横田は目の前の食糧をガツガツと食い漁った。

「うまい…うう…生きてて良かった。」

食料を食べ終わると、久々の空腹感で直ぐに眠りに着いた。

明日はどんな獲物が来るだろうと、横田は楽しみに明日を待った。

翌日。

この日は朝から「獲物」が良く通った。

老人・子供・女性…

弱い者ばかりを狙う横田。

罪悪感など既に持ち合わせていない。

もともと巻き込まれただけに、横田は「自分は全く悪くない」と心の底から思いこんでいた。

「そろそろ「獲物」を変えて行こう。」

横田はそう思い、自分の持ち物を見返した。

食糧3日分、果物ナイフ、女性用の服、トマトケチャップ…etc

どうも戦闘は出来そうにない。

横田は効率良く「獲物」を狩る為の策を練った。

「そうだ!! 女装だ!!」

女性用の服に身を包むと、伸びた髪の毛を軽く纏め、帽子を深くかぶった。

数日の断食が続く、横田の体はすっかりと痩せ細っていた。しゃがみ込んでいれば、喋らない限り分からないだろう。

早速横田は橋の上にしゃがみ込むと、

「獲物」を待った。次のターゲットは…戦士。

「戦士は女性に弱いはず!」と、勝手な思い込みを横田はしていた。

すると、早速最初の「獲物」が現れた。
20歳前後の若剣士といったところか。

横田はトマトケチャップを口に含み、
戦士が目の前を通るのを待った。

しゃがみ込んでいる女性(?)を見て、
若剣士が声をかけようとしたその瞬間…

『ゴフウツ!!』

派手にトマトケチャップを吹き出した。

若剣士は動揺し声をかける。

「大丈夫ですか!？」

若剣士が近づいた瞬間、

横田は服に忍ばせたナイフを首元に突き付ける。

「…命がおしけりゃ…装備一式おいてきな。」

耳元でボソツと呟く。

若剣士は冷や汗を流しながら、説得を試みる。

「…お前…男か…卑怯だと思わないのか…?」

横田はフツと鼻で笑うと、若剣士に言い放つ。

「卑怯?何がだよ。いいからさっさと装備をとけ。」

若剣士は仕方なく横田の指示に従う。

横田は若剣士の装備を奪うと、縛りあげその場に残した。

「おい！！待て貴様ッ！！」

横田は振り返ると、万面の笑みで若剣士に言う。

「バーカ♪」

そう言って横田はその場を走り去った。

若剣士はその後ろ姿を悔しげに眺めていた。

こうして装備の整った横田は、

次の町へ向けて歩き出した。

第4話：悪人から生贄に（前書き）

悪人まがいの行動で装備を整えた横田は次の街を目指す。目指す先は農業の街、ウベンクルガ。

第4話：悪人から生贄に

―ウベングルガ

農場中心の街。

ここで採れる野菜や、加工物は高値で取引される。

横田はこの街へと来ていた。

「腹へったなあ…。」

若剣士の装備を奪い、装備的には充実しているが、
いかなせん手持金は少ない。

買うか奪うか：横田は悩んでいた。

既に「奪う」という発想が悪人以外の何者でもない。

結局「奪う」事にした横田は、獲物を求めてさまよっていた。
商店街には数多くの品が並べられ、食料も多々あった。

しかし、こんな街中では直ぐに捕まってしまう。

横田は少し街から外れた農場を目指した。

「うおおおおおおお！！」

多くの野菜が所狭しと実をつけている。

横田はイソイソと袋を取り出すと、野菜を手当たり次第採取した。

袋が一杯になり、横田は満足感で一杯だった。

老人が足元めがけてタツクルをかました。

「うわあああっ!？」

横田は耐えきれず転がった。

マウントポジションをとった老人。

その顔は怒りで満ちている。

「殴り殺してくれるわああっ!!!！」

老人の気合の入ったパンチが横田を襲う。

横田はガードしようと試みるが、さすがに無理そうだ。

気合を入れ歯を食いしぼる。

『メゴツツツツ!!!!』

凄まじい音があたりに鳴り響いた。

横田は一撃で戦闘不能になった。

遠ざかる意識の中で老人のほくそ笑む姿が、

横田の頭に強く残っていた。

その手にはメリケンサックが握られていた…。

気がついた時には、パンツ一丁であった。

両手を縄で縛られ、足も結ばれている。

まともに動けそうにもなかった。

横田は諦めて眠る事にした。

目を閉じると話声が聞こえる。

―あいつ…生贄にどうかのう？

―そうじゃな…

―明日…ウベングルガ様に捧げよう。

―そうしよう…

横田は青ざめると必死に声を上げた。

「俺は上手くないぞう！！健康診断でも引っかかるぐらいだ！！」

「やめてくれえ！！血糖値高いからあ！！」

横田の声はむなしく独房に響いた。

幾ら声をあげても、誰も応えてくれない。

そのまま朝を待つしかなかった…。

第5話：生贄と美女（前書き）

野菜泥棒により、独房へと監禁された横田。
生贄に決定し、刻一刻と時間は過ぎて行つた。

第5話…生贄と美女

―ウベングルガの生贄

汝我に生贄を捧げよ。さすれば永久の繁栄を約束しよう。
汝我に従え。さすれば永久の豊潤を約束しよう。

この土地に古くから伝わる言い伝え。

横田はそれを耳にした。

生贄になるのが決まってから眠れぬ夜を過ごしていた。
ふと言い伝えを思い出し、その度に恐怖を抱く。

段々と精神崩壊していく横田。

楽しかったキャバクラの思い出が、走馬灯のように駆け巡る。

「かわいかったなあ…ミヨちゃん…。」

この期に及んでも俗な考えしか浮かんでいない。
最早救いようがない。

生贄に捧げられる時間は、刻一刻と迫っていた。

「そろそろ時間じゃな…。」

老人達が申し合わせて、独房へと入ってくる。

横田は虚ろな目でそれを眺めていた。

老人達は横田をカゴに入れると、

ウベングルガの住む山へと歩き出した。

「ふががあ！ふがふがつ！！」

猿轡さるべしわをされ、まともに声を出せない。

気温が徐々に下がって行く。

どうやら山の頂上を目指すらしい。

パンツ一丁の横田にとっては、中々堪える寒さだ。

頂上には岩をくり抜いて作られた城。

その前には生贄を捧げる穴があった。

「では皆の衆…。」

老人が皆に号令をかける。

他の老人達はそれに従い、各々準備を始めた。

横田の猿轡は外され、ようやく喋れるようになった。

「ぶはっ！！お前ら…こんな事していいと思ってるのか！！」

横田の問いかけに老人達は冷たく言い放つ。

「お前に言われたくないんじゃないかな…。」

ふっ…と鼻で笑いながら老人は答えた。

まあ、当然だろう。

犯罪者に言われる筋合いはまるでない。

老人達は横田を穴の前へと運ぶと、
それぞれ祈りを始めた。

「今季の豊作を祈って…一人の命がそちらへ向かいます…」

「血糖値が高いようですが…どうぞお怒りになれませんよう…」

随分と勝手ないぐさだ。

横田はワナワナと震えながら、老人達に言った。

「お前ら…俺が帰ってきたら滅亡させてやる!!」

老人が答える。

「出来るもんならやってみろ!この中年が!!」

各自横田の悪口を言いだす。

「万年童貞が!!」

「窓際族め!!」

「えー…バーカバーカ!!」

ちよっただけ涙が出た横田であった。

「おま…」

言いかけた瞬間、穴に向かって落とされる。

「ぎゃあああああああああ!!」

絶叫をあげて横田は暗い穴へと消えていった。
落ちるスピードは、まるでフリーフォール。

「あはははははは!!」

笑うしかない状況に横田は高笑いを上げていた。
半ば崩壊気味であった。

『バシャーシューーン!!!』

落下した先の水たまりに落ちた。
いや、湖と言った方が正しい規模。

「ゴボツゴボボ…」

衝撃で軽く意識が飛びそうになる横田であったが、
必死に泳ぎ岸まで辿り着いた。

「こ…これは…」

端正な作りの門構えに、上等そうな布で作られた絨毯。
地下にこれほどの建物があったとは…。

横田は身を起こすと、ゆっくりと門を押してみた。
ピクリとも動かない門。さすがに高さ6M近くでは…。

そう思った矢先に門が開いた。
門はゆっくりと開いて行く。

…スライドで。

「スライド式かよ!!!」

思わずツツコミを入れる横田であった。

開いた門の先には、一人の女性の姿。
絶世の美女と言っても過言ではない。

見事なスタイルに横田は見とれていた。

「いかんいかん…。」

我に返り、女性に話しかける。

「すみません。あなたはどなたですか？」

横田は精一杯紳士的に話しかけたが、
女性の反応は全くない。

「あのう…あなたも生贄に？」

先程と同じく無反応。

さすがに女性に無視されると、精神的にくるものがある。

困った横田は、相手が喋り出すのを待つことにした。

一時間…

二時間：

待てど待てども女性は一向に話す気配はない。
それどころか、ぴくりとも動かない。

横田は恐る恐る近づいて行った。

近づけば近づくほど、その豊満な胸に視線が移る。

1M程度の距離まで近づき、じっと女性を眺める。

「うむ：いい乳だ：。」

横田は頷いてる。

その姿は変態そのものであった。

相変わらず無反応な女性に、横田は遂に行動に出た。

「おりゃあああああああああ！！！」

掛け声と共に女性へと飛び付いた。

「もう我慢できん！！！」

血走った目で女性を間近で見る。

そして抱きついた横田。

「ふふふ：あれ：変だな：固い：」

その瞬間女性は崩れ去った。

「ぐぐぐ…ごめんなさーい!!」

混乱している横田はわけのわからず謝った。

横田が抱きついたものは、ただの石像であった。

「あはははははははは!」

笑い声が何処からか聞こえる。

横田は辺りをキョロキョロと伺う。

先程の石像と同じ女性が現れた。

「馬鹿じゃのう…笑わせて貰ったわ。」

女性はクスクスと笑っている。

状況の理解出来ない横田は、女性に問いかけた。

「え…と…。どういう事ですか…?」

女性はニヤニヤしながら横田に答えた。

「それはのう。わらわの悪戯じゃ。ぶはっ!」

再び吹き出す女性。

横田は顔を真っ赤に染めた。

「いやあ…どうして人間の男はこう馬鹿なんじゃろうか。」

女性はそういうと、先程とは打って変わった。

鋭い目つきへと変わる。

横田はそのギャップに戸惑いながらも、
かろうじて声を出した。

「もしかして…あなたが…」

女性はニヤリと笑みを浮かべ答えた。

「わらわが…ウベングルガじゃ。」

横田に冷たい汗が流れた。

第5話：生贄と美女（後書き）

感想など頂けたら嬉しいです。

第6話：生贄から部下へ

見つめあうとくく素直にくく言葉にくく出来なくく

横田の頭をとある歌が流れた。

ーウベングルガ：まさかの美女。

横田は必死に頭を捻らせた。

ろくな考えが浮かばないが、浮かばなければ生贄に。

人生の中で一番思考を巡らせた結論。

ーそうだ。魔王を利用すれば…？

魔王の部下であると嘘をつき、上手いこと取り入る。
コレしかないと言った横田は考えた。

「あ…。」

横田は恐る恐る声をあげた。

「なんじゃ？」

冷たく答えるウベングルガ。

「魔王様の使いで来たんですが…。」

おどおどしながら言う横田に、

疑問を抱いたウベングルガであったが、
魔王の使いならば話ぐらいは聞いておかなければ。

そう考えたウベングルガは、横田の話を聞くことにした。

「ほう…。申してみよ。」

横田は少し安心すると、思いつくままに喋った。

「実はふもとの街で不審な動きがありまして。」

「その街を壊滅させよ。との命令をお伝えに参った次第です。」

ウベングルガは少し考えて答えた。

「しかし、ふもとの街はわらわに忠誠を誓っているが…。」

横田の背中に冷たい汗が流れた。

ここで嘘がバレたら間違いなく殺されるだろう。

「実は、忠誠を誓いながらも、勇者を招き入れたと噂がありまして。」
「

嘘ではない。しかし、事実でもない。

確かに勇者は来た。泥棒で。

「真実であれば放ってはおけんな…。」

「…よしっ!!」

横田は心の中でガツツポーズをした。

このまま乗り切れば隙を見て脱出。逃走してしまえば問題無い。

「ふむ。お前も一緒にふもとの街まで来い。真偽を確かめる。」

—ええええええええええええええええ！

心の中で絶叫した。

非常にまずい展開である。

「そうと決まれば行動じゃ。」

ウベングルガは部下の魔物を呼びだすと、奴隸馬車を用意するよう伝えた。

「さあ。ついて参れ。」

横田はコクコクと首を縦に振った。

そして、ウベングルガの後をゆつくりと着いて行った。

暫く歩くと、横田が落とされた穴の前。

つまり正門へと辿り着いていた。

目の前には奴隸馬車が用意されている。

見た目通り、馬の代わりに生贄にされた男達が馬の代わりをしていた。

さすがにその光景に胸が痛んだ横田だったが、それを黙殺し、馬車へと乗り込んだ。

数十分後、馬車は街へと辿り着いた。

街では老人達が土下座してお出迎えをしていた。
それほどウベングルガに敬意を持っているのか。

こうして、老人達とウベングルガ・横田ペアの話合いが始まった。
最初に口を開いたのはウベングルガであった。

「…して長老よ。こやつの話は本当かのう？」

事態を掴めていない長老は、キョトンとした表情を浮かべている。

「一体何の話でしょうか…？」

ウベングルガは少し表情を曇らせた。
そして怒りのこもった声を響かせた。

「勇者を招き入れた事じゃ！！知らぬとは言わせぬぞ！！」

ざわざわと老人達がざわめき始め、
それに腹を立てたのか、ウベングルガは更に声を荒立てた。

「ええい！！はつきりせんか！！この愚民共め！！」

それを聞いて老人達も怒りをあらわにした。

「そういう言い方は無いでしょう！？」

「ワシらはどんな要求にも耐えてきた！いわれの無い事でそう言われるのは…。」

その言葉を遮り、ウベングルガが怒号をあげた。

「もうよい！！真実だろうと嘘であろうと、皆殺しにしてくれるわ！！！」

そう言ってウベングルガは外に出た。

「おい！お前何を言った！！！」

横田に非難が浴びせられる。

横田は必死に言い訳を考えた。

「ふっ…お前らの為さ。」

「ウベングルガを倒す為にここに引きずり出したんだ！！！」

老人達は驚きの表情を浮かべ、横田を凝視していた。
これ幸いと横田が言葉を続ける。

「お前らは何だ！？奴隷か！？」

「違う！！人間として、自由を勝ち取るなら今だ！！！」

『全員武器を取れ————！！！！』

半ば押されるように各自頷き、各々武器を探しに散った。
その隙に横田は外へと逃げ出した。

予想外の展開だったが、これで逃げる隙も出来るだろう。

横田は辺りを見回した。

「…!?!」

街中が凍り始めていた。

街の中央でウベングルガが吹雪を吐いている。

横田は逃げようと振り返り、駆けだそうとした。

「おわっ!?!?!」

何かに躓いて転んだようだ。

それをじっくり眺めると、凍りついた子供であった。

「……」

横田に不思議な感情が芽生えた。

それは「怒り」であった。

ウベングルガの仕打ちに、さしもの横田も腹の底から怒りが込み上げる。

―元をただせば自分が悪い…。

横田の脳裏にふと浮かんだ。

それと同時に横田は走り出していた。

ウベングルガのもとへと…。

第7話：決戦に向けて

「うわああああああ!!」

遠くで叫び声がした。

横田はそちらに向けて全力で駆けだした。

―勝てるだろうか？

そんな疑問も頭に浮かんだが、即座にかき消し進む。
ウベングルガが近づくにつれて気温は下がり、
辺り一面雪景色。

「待てッ!!」

横田を止める一人の青年。

この前身ぐるみを奪った若剣士であった。

「俺の装備を返せ!!!!」

若剣士が叫んでいる。

「悪いな!!後で!!ちょっと急いだから!!」

若剣士を置き去りにし、横田はひた走る。

「…いや…待てよ…?あいつ使えないかな?」

横田は立ち止まり考える。

味方は大いにこした事はない。

「おいお前。俺と一緒に戦うんなら装備返すぞ。」

若剣士に向かい横田が言う。

状況の掴めていない若剣士は横田に問う。

「誰とだ？とゆーか、お前に条件をつきつける権利はないだろ…。」

それもそうだと横田は頷く。

しかし、今はそんなノリに付き合っていない。

「単刀直入に言うと、今からウベングルガを倒す。お前の力を借りたい。」

そういうと横田は土下座して懇願した。

「頼む！！力を貸してくれ！！」

それを聞いて、若剣士は少し戸惑いの表情を浮かべた。

あれ程卑怯な男が、あのウベングルガを倒すと言っている。

しかもその為に土下座まで…。

若剣士は一つ質問をした。

「…なんとなく状況はわかった。それは誰の為に戦うんだ？」

横田は考えた。

言われてみると、何の為だろう？

何の為に…。

そして横田は答えを出した。

「…わからん!! あいつにムカついたからだ!!」

それを聞いて若剣士は、口をポカンと開けて哑然としている。
暫くして声を出して笑いだした。

「…ハハッ…アハハハハ!!」

横田は少しイラッとした表情を浮かべた。
それを見て若剣士も、慌てて言葉が続けた。

「いや…すまない。予想外の答えで驚いたよ。」

「…だけど。納得した。俺も手伝おう。」

横田は安堵の表情を浮かべると、若剣士に握手を求めた。

「あの時はすまなかった。有難う。」

若剣士も握手に応え、握り返した。

「いいさ。後で一発殴るから。」

横田はビクッと反応したが、それもしようがないと小さく頷いた。

「お前…意外と嫌な奴だな…。まあいい。名前は？」

横田が問いかけた。

「クレール：クレール・リケミアルドだ。」

こうしてクレールが仲間になった。

横田はクレールに問いかけた。

「で？武器はどうするんだ？」

クレールは少し考えると、近くの民家へ入り大きめのハンマーを取ってきた。

「これでいいさ。」

横田は頷くと、クレールと共に駆けだした。

―その頃

オルターナ王国では噂が飛び交っていた。
ウベングルガの異変を旅人が伝えたからだった。

当然それは、アンジェの耳にも入っていた。

「：ウベングルガの街が！？」

旅人に問いかけるアンジェ。

「はい。何やら騒動が起きていましたが…。」

魔王の4天王であるウベングルガ。

それが制圧する街だけに、オルターナ王国も常に情報を仕入れている。

「気になるわね……。様子を見に行きましょう。」

アンジェは軍と連携を取り、100人編成の小隊を編成する。ウベングルガに向け、出発準備を始めた。

準備は1時間程度で整った。

アンジェを小隊長とし、アンジェ小隊はウベングルガへと向かった。

近づくにつれ気温が僅かに下がっていく。

今までにない環境に、アンジェの不安は加速していくのだった。

第8話…合流

「もう少しでヤツの所だ。準備はいいか？」

横田はクレールに問いかける。

クレールは静かに頷いた。

「…よし。問題は…どうやって倒すかな…。」

クレールは静かに頷きかけた。

しかし、途中でハッとした表情を浮かべ、横田に問いかけた。

「考えてないのか!？」

横田は静かに頷いた。

クレールは大きく肩を落とした。

「やっぱり…やめとこうかな…。」

クレールはそう呟いた。

横田も聞こえていたが、聞こえないふりをして進んだ。

「まあ、魔物といっても女だろ？ 楽勝楽勝♪」

お気楽な横田に、クレールは大きくため息をついた。

「はあああ…お前知らないのか？」

クレールの問いかけに横田はキョトンとしている。

「やっぱり：ウベングルガは魔王の配下の四天王だぞ…。」

横田はピタリと立ち止まると、

ギギギギと顔を引きつらせながら振り向いた。

「マジ：？」

クレールは頷く。

「それって強いよね：？」

横田は汗をダラダラと流しながら問いかける。
またもクレールは頷いた。

「ええええええええ！？」

横田は叫び声をあげた。

「ムリムリムリーーー！！帰る～～～！！！」

逃げようとする横田を、クレールははがいじめにし、
横田に問いかけた。

「ちょ…さっきまでの勢いはどうした！！？」

「ムカついたんだろ！？ウベングルガに！！！」

大声をあげるクレール。しかし、横田は必死に逃げようとする。

「命あつてのモノダネだろー！ー！？」

クレールは大きく首を横に振る。

横田はウルウルとした瞳でクレールに言った。

「だって死にたくないものー！ー！！」

そう言う横田をクレールは無視する。

「まだ駅前のキャバクラのミヨちゃん口説いてないんだよー！ー！！」

「頼むから帰らせてー！ー！！」

号泣しながら言う横田に、クレールは飽きれはてていた。
そして冷たく言い放つ。

「諦めろ。馬鹿野郎。」

「ああああー！ー！ー！ー！」

横田の悲しい叫びが響き渡った。

ーその頃

オルターナ王国を出発して2時間程度。

ようやくウベングルガ周辺まで辿り着いたアンジェ小队。

つくなり聞き覚えのある叫び声が聞こえる。

「アンジェ様…今の声どこかで…」

兵士の一人がアンジェへと問いかける。

「…知らない。私は知らないわ。」

遠い目をしながらアンジェは答えた。

号令を掛けて街へと侵入する。

凍りついた街並みがアンジェ達を凍りつかせた。

「これって…。」

アンジェが辺りを見回すと、凍りついた人々の氷像。
老若男女問わずに、全ての人が凍りついている。

「酷い…。」

アンジェは怒りをあらわにした。
そして先程叫び声目指して馬を走らせた。

そこには二つの面影があった。

「…おっさん…。」

アンジェは再び呟いたのだった。

そこには言い争うクレールと横田の姿があった。

「俺はまだ20代だ!!」

再び横田はアンジェに向かって言ったのだった。

第9話：決戦！ウベングルガ（1）

「ここで何してるの…？」

アンジェは重い口を開いた。
出来れば会いたくなかった。

「お前に関係ないだろ…！」

横田は答えた。

アンジェは溜息をつく、横田を無視して先へと進む。

「お知り合いか？あの女性…。」

クレールが横田に問いかけたが、
横田はアンジェを睨みつづけていた。

アンジェがクレールに問いかける。

「あなた。この街はどうなってるの？」

クレールは事情を説明した。
ついでに横田に装備を奪われた事も。

「はあああああ…。」

ドラゴンのブレス並にアンジェは溜息をつく。
そして横田にいった。

「あんた……最低ね。」

横田は目をそらし、口笛を吹いている。

ベタなりアクションは、アンジェに二度目のため息を吐かせた。

「まあ……邪魔だけはしないでね。」

アンジェはそう言う、号令を掛けウベングルガのもとへと向かった。

横田とクレールは置き去りにされ、ボー然と見送っていた。

「で…？ どうすんだ？」

クレールが横田に問いかける。

横田はボー然としている。

「おい！！横田！！」

ハツと横田は我に返り、クレールに言った。

「じゃ……帰ろうか。」

思わずクレールは声をあげる。

「ええええええええええ！？帰るの！？？」

横田はコクコクと頷いた。

「ちよつと待て。あんな女の子に任せる気か？」

「どれだけお前は最低なんだ!!」

横田は少し考えて言った。

「こんだけー！ー！」

とりあえずギャグを言ってみた。
しかし、それがまずかった。

『ドゴッ!!』

鈍い音が辺りに響くと、横田は前のめりに倒れた。

「一発の約束だったな!!」

そういうとクレールが手持ちのハンマーを投げ捨て、
横田の装備を奪った。

「お前にはがっかりだ!!」

横田は気絶している。聞こえない横田に台詞を残し
クレールはアンジェの後を追った。

アンジェに追いつくと、クレールは懇願した。

「俺も連れて行って下さい!」

アンジェは少し考える。

横田の仲間だった男を信用して良いものか。

「あなた：横田と行くんじゃないくて？」

クレールは首を横に振り、アンジェに言った。

「あんな馬鹿はしりません！！凍りつけばいい！！」

軽く事情を聴き、クレールの動向を許可したアンジェ。

クレールは鼻息荒く、ナイト気取りでアンジェの横を歩く。

街の中央にはウベングルガが高笑いをあげてそこに居た。

アンジェとクレールは身構えた。

ウベングルガはアンジェ達の方を見ると。冷たく言い放つ。

「ん：？何じゃ貴様ら。凍りに来たのか？」

そう言ってクスクスと笑うウベングルガ。

アンジェはギリツと歯を食いしげると、ウベングルガに言い放つ。

「街の人達を元に戻しなさい！さもないと：！」

そう言って武器を強く握りしめる。

クレールも同様に戦闘モードである。

「さもないと：？なんじゃ？わらわを倒すか？」

ウベングルガは一呼吸置くと、あからさまに敵意をむき出しにする。

「なめるなあああああ！！馬鹿な人間どもがあああ！！」

一段と吹雪が強くなる。

アンジェは小隊に向け号令を掛ける。

「行くぞお！！ヤツを倒すのよ！！」

―おおおおお！！！！

けたたましい声と共に兵士達が飛びかかる。

「この雑魚どもがああああ！！」

ウベングルガは身を震わすと、より強い冷気を放出する。
飛び付いた兵士達は次々と氷漬けになっていく。

「くっ…！！」

アンジェは舌打ちすると呪文を唱え始めた。

その様子を見て、クレールが時間を稼ごうと飛びかかる。

「せいっっっ！！」

気迫と共に剣を振りおろす。

ウベングルガはそれを片手で受け止め、アンジェの方へと弾き飛ばす。

クレールは何とか身をよじらすと、アンジェへの直撃を避ける。
しかし、今の行動で足を少し捻ってしまった。

アンジェはクレールの状態に気付いていたが、
呪文をときらせてしまえば、またやり直す羽目になる。

アンジェは構わず呪文を唱え続けた。

クレールは痛む足を黙殺しながら、続けてウベングルガと対峙する。

アンジェに気づかれては邪魔されるかもしれない。

クレールは再び気合と共に打ち込んでいく。

しかし、先程より僅かに遅い。

ウベングルガは軽くかわすと、クレールに向け冷気を放出する。

「がっ…!!」

うめき声をあげクレールがよろめく。

半身が凍りつき始めていた。

徐々に体は固まっていく。

クレールは身動きが取れない。

「ははははは!! 凍り付くがよい…。」

ウベングルガは更に冷気を強めた。

「く…そ…。」

クレールは氷漬けになった。

それとほぼ同時に、アンジェの呪文が完成した。

「くらないさい!!」

炎のレーザーがウベングルガに飛来する。

避けきれず、ウベングルガは炎に包まれた。

「ぎゃあああああああああ！！」

ウベングルガの絶叫が木霊する。

「やった！！」

アンジェはガッツポーズを取る。

「…なんてのう♪」

ウベングルガが片手を振ると、炎は消え去った。

「そんな馬鹿な！？炎が効かない！？」

アンジェは慌てて次の呪文を唱えた。

そんなアンジェを見ながら、ウベングルガは笑いながら言う。

「あははは！小娘。その程度でわらわが死ぬと思ったか？」

アンジェは顔をしかめながらそれを聞く。

「仮にも4天王と呼ばれるわらわを…」

『舐めるでないぞ！！！！』

怒号と共にアンジェへ飛来する氷の刃。
アンジェは慌てて身をひるがえす。

なんとか避けはしたものの、呪文が途切れてしまった。

「くっ…。」

立ち上がろうとしたアンジェの目の前に、ウベングルガが立ちふさがっていた。

「どうした小娘？ 必死じゃのう…。」

見下した目線でアンジェを睨む。

アンジェはバックステップを踏み距離を取る。

「ほう…まだやるか？」

馬鹿にした口調でウベングルガが問いかける。唇を噛みしめながら、アンジェは答えた。

「当り前よ!!」

そう言って短剣を抜く。

再び対峙したアンジェとウベングルガは睨みあった。

―その頃

寒さで目が覚めた横田。

状況を把握できていない。

「あれ…？ 俺どうしたんだ…。」

冷静にあの時の事を思い返す。

「あああああ！！あの野郎！！いきなり殴りやがって！！」

思い出したかのように声をあげる。

しかし、パンツ一丁でこの寒さ。

すぐに横田はガタガタと震え出した。

「このまま…だと…風邪…引く…。」

奥歯をガタガタと震わせながら、

横田はめばしいものを探していた。

とある倉庫に行くと、作業着がおいてあった。
少し豚臭かったが、横田は迷わず着用した。

「よし…これで寒くない。」

近くに会った作業用の長い棒を見つけ、
横田はクレールを殴るべく走り出した。

「あの野郎おお！！一発殴ってやる！！」

最早目的は復讐へとかわっていた。

横田はウベングルガのもとへと走っていった。

第10話：決戦！ウベングルガ（2）

「きゃあああああ！！！」

アンジェの声が一面に広がった。

ウベングルガは氷の刃を喉元に突き付け、
クスクスと笑っている。

「どうした？もう終わりかのう…？つまらん。」

そういつてアンジェの脇腹を蹴る。

「うぐっ…」

アンジェはうめき声を漏らす。

「どうした！？痛いのか！？ほれほれほれ！！！」

続けてアンジェを蹴りつつける。

「ごほっ…」

アンジェの口から紅い液体が噴き出る。

ウベングルガは構わず蹴りつつける。

「どうしたあ！？抵抗せんのか？このまま死ぬか！？」

そうしてウベングルガが再度蹴ろうとした瞬間、
アンジェは何とか体を捻り、それをかわした。

「ほう…人間にしては丈夫じゃのう…。」

パチパチとウベングルガが嫌味な拍手をする。

アンジェはそれを睨めながら精一杯の強がりと言った。

「あんたなんか…負けないわよ！！このブス！！」

ピクンとウベングルガの眉がひきつった。

「小娘…もう一度言ってみろ…。」

アンジェは大きく息を吸うと、

ウベングルガに向けて叫んだ。

「何度でも言ってやるわよ！！ブスブスブスブスブス！！！！！！」

ウベングルガは下を向き、プルプルと震えている。

「小娘…貴様も…氷漬けにしてくれるわぁ！！！！」

ウベングルガは大きく息を吸い込んだ。

「今だっ！！！！」

アンジェは懷にしまっておいた、赤い粉を投げつける。

「ゲホッ！！！！？」

ウベングルガは大きくせき込んだ。

アンジェが投げつけたものは、唐辛子の粉末。
辛党であるアンジェは食事の際、これを使用していた。

「てやあああああ!!」

気合と共にアンジェの拳が炸裂した。

「がっ…!?!」

ウベングルガはよろめいた。

アンジェは素早く距離を取ると、呪文を唱え始めた。

「小娘…楽には死ねんぞ…ゲホッ…。」

ウベングルガは呼吸を整えている。

アンジェは無視して詠唱を続けた。

ウベングルガはアンジェの様子に気づくと、
氷の刃を出現させアンジェに走らせる。

避けれそうになかったアンジェは、
体中に気合を込めた。

『ドスドスドスッ!!』

幾つかの刃が体に突き刺さった。
しかし、アンジェは意に介さず呪文を続ける。

ウベングルガが次の刃を完成させる寸前、
アンジェの詠唱が終わった。

「それでも…くらえーっ！！」

巨大な火球がウベングルガを襲う。
溜まらず防御態勢に入る。

「くっ…こんな小娘がこれほどの…！！」

ウベングルガが悔しげに呟く。

「舐めないでよね！！それでも…神官なんだから！！」

火球がウベングルガを飲み込んだ。

『がああああああああ！！』

ウベングルガが絶叫をあげる。
アンジェは力尽き、その場にへたり込んだ。

「これで…ダメなら…もう…」

肩で息をするアンジェ。

「あああああああ！！」

ウベングルガが更に叫び、炎は四散した。

「小娘…今のは…効いたぞ……。」

ウベングルガが息を切らしている。

先程の呪文でかなりのダメージを負ったようだ。

「しかし…限界のようじゃな!!」

ウベングルガがアンジェにむかって走り出した。

「くっ…」

アンジェはよろめきながら立ち上がり、
ウベングルガを迎え撃つ態勢をとった。

「死ねええええええ!!」

ウベングルガが振り掛かったその時、
一つの叫び声が響いた。

『クレーーーーール!!!! 何処だああ!!!!』

横田が登場した。

あっけにとられる二人。

「そこかああああ!!」

クレールの氷像を見つけると、
全力でタックルをかました。

『あっ…』

ウベングルガとアンジェ。
二人が揃って声をあげた。

『ガシャーーン!!』

派手な音をあげ、氷像は崩れ去った。

…

…

沈黙が辺りを包み込む。

「えー…：どうしよう？」

横田はそういつて、アンジェとウベングルガを見る。

『しるか馬鹿!!』

二人の声が再び揃うのだった。

第11話：終結！ウベングルガ

何やら気まずい雰囲気である。

アンジェとウベングルガは横田を睨んでいる。

「折角盛り上がったのに…。」

そういった非難の眼差しだ。

横田の頬に一筋の汗が流れおちる。

「えっと…。」

横田は必死に頭を回転させる。

「あははは！！みつけたぞウベングルガあ！！」

「お前は許さないからな！！」

…

…

再度沈黙が辺りに広がる。

「だいなしじゃの…。」

「だいなしね…。」

ウベングルガとアンジェがそれぞれ顔を見合わせた。
横田は切なげに叫んだ。

「なんだよおー！！二人して酷いだろ！！」

「折角空気変えようとしたのにいゝゝ！！」

横田がじだんだを踏んでいる。

その光景を見ていたウベングルガとアンジェ。

「なんか馬鹿らしくなってきたのう…。」

「そうね…やる気なくなったわ…。」

そしてお互い顔を見上げると、
クスクスと笑いだした。

『あはははは！』

二人とも声を出して笑っている。

状況がつかめていない横田は、ボー然とそれを見ていた。

「えっと…この展開どうすれば？」

ウベングルガが答える。

「もうわらわの負けでよい。好きにせい。」

半ば飽きれはてた様に言う。

横田の頭にナイスアイディアが浮かんだ。

「じゃあ、俺と一緒に来い！！」

四天王をここで仲間にしておけば、
後々便利だろう。

横田はそう考えていた。

「それは…わらわにお前の傍に居ろ。と言っておるのか？」

気のせいでなければ、
ウベングルガの頬は僅かに赤く染まっていた。

横田は少し考えて答えた。

「そうだ！！俺と一緒に来い！！」

二度目の台詞。だが方向性が変わっている事に気付いていない。

「え…わらわが…人間の男と…？」

なにやらモジモジし始めたウベングルガ。

「…わかった。浮気は許さぬぞ♪」

そう言って笑顔で横田に向ける。

『へ…？』

アンジェと横田の声が揃った。

「じゃから、傍に居てやるからの…浮気は許さん。」

再びウベングルガは顔を赤らめた。

『ええええええええええええええ！？』

アンジェと横田の声が再度揃った。

「ちよ……待って……ええええええ！？」

横田は慌てふためいている。

「よかったわねー♪彼女出来たじゃない♪ぷぷっ…」

アンジエは腹を抱えて笑い転げている。

ウベングルガはニコニコしながら横田に近づく。

「今日から恋人同士じやの…」

頬を染めながらいうウベングルガ。

横田は考えた。

—いや、単に魔物ってだけで、スタイル抜群・容姿端麗しかも…強い。

考えは纏まった様だった。

「宜しくお願いします！」

一同はオルターナ王国へ向けて歩き出した。

第12話：魔王との出会い

「これからどうするの？」

アンジェが問いかける。

「んー…どうしようか。」

横田は曖昧に答えた。

オルターナ王国へと出発し、5時間ほどで到着。

クレールがおもむろに地図を指さす。

「あ…ここ…！」

一同がクレールを凝視した。

「酒の名産地ですよね。」

全員がため息をついた。

いまだ方向性の決まらぬまま、

一同はアンジェの屋敷にてのんびりしていた。

そんなある日、旅人から一つの情報が手に入った。

「北の大地に魔王が出現したらしい。」

その情報の真偽を確かめるべく、

一同は北の大地、ノースベルへと向かう事にした。

ーノースベル

年中雪に覆われた雪原地帯。

名産品は「ノースウオッカ」。

オルターナ王国からおよそ三日程の距離である。

一同は身支度を整えると、ノースベルを目指し旅に出た。
街道を歩いていると、山賊が現れた。

それも一つや二つではなく、今日だけで既に6つ。

ウベングルガが居る以上、その程度のヤツらに遅れは取らないが…。

さすがに頻繁に出現するのも鬱陶しい。

特にイライラしているのがアンジェだった。

「ああッ!! もー!! ウザい!!」

本日7つ目の山賊グループが出現した所で、
アンジェがついにキレた。

「もー!! しつこいヤツって本当にムカつくのよ!!」

一体過去に何があったのだろうか。

「こうなったら森ごと…。」

ブツブツ言っているアンジェをしり目に、

横田は山賊へ質問してみた。

「なあ、なんでこんなに山賊が出るんだ？この街道。」

山賊達はキョトンとしている。

「もうお前達で7回目だぞ。襲われたの。」

山賊達は互いに顔を見合せて相談している。

「ええい！！どうでもよいわ！！皆殺しじゃ！！」

突如ウベングルガが怒号をあげた。

山賊達は怯えている。

「ちょっと待て！！気持はわかるが、無暗な殺生はいかん！！」

クレールが止めに入る。

「ほう…貴様、いつからわらわに命令出来る様になった…？」

何やらまずい雰囲気である。

横田は振り返ると、山賊達に言った。

「まあ…こういう訳だから…分かるよな？」

山賊達はコクコクと頷くと、森の中へと消えていった。

その後。街道を歩く一同からは、会話が消えていった。

殺気立ったパーティに恐れをなしたのか、

繁みの中から様子を伺う盗賊達。

そのまま三日間、気まずい雰囲気で街道を進んで行った。

ノースベルに着く頃には会話も無く、

一先ず宿を手配し各々寝室へと散って行った。

「はぁ：一体どうなる事やら：。」

一人ベッドに寝転がり、横田が呟く。

『横田くおるかのう？』

ウベングルガが訪ねてきた。

無視しようかと考えたが、後が怖いのでやめておいた。

「いるよー開いてるよー。」

ウベングルガがドアを開けて入ってくる。

「！！！」

その姿を見て、横田は驚いた。

街で流行りのセーターにチェック柄のスカート。

ブーツと白い手袋と帽子。

「どうじゃ？ 似合うであろう？」

ニコつと悪戯っぽく笑うウベングルガ。

横田はその姿をボー然と見ていた。

「似合わんか：：？」

反応のない横田を見て、ウベングルガがシュンと肩を落とした。

「いやいやいや！！超可愛いです。ハイ。」

横田は慌ててフォローをする。

ウベングルガは再びニコっと笑顔を作ると、横田を誘った。

「街を歩かんか？この三日間肩が凝ったからのう。気晴らしじゃ♪」

こうして、横田とウベングルガは街へと繰り出した。

暫く歩くと、横田の腹が鳴る。

ついてから何も食べていなかった。

二人は目に着いたレストランに入ると、

ノースウオッカと幾つかの食事を注文した。

「うんまあい！！！」

横田が喜びの声をあげる。

酒を飲んだのは久しぶりであった。

「そうか♪確かに美味しいのう♪」

ウベングルガも上機嫌に横田に話しかける。

二人で名産品に舌鼓を打ち、土地の地酒と料理を堪能した。

「そろそろ帰ろうか？」

横田が問いかけると、ウベングルガも満足げに頷いた。

「お会計：21万ジェルです♪」

レジのお姉さんが軽やかに叫ぶ。

『…』

横田とウベングルガは顔を見合わせた。
お金が足りなかった。

「のう…どうする…？」

ウベングルガが横田に問いかける。

「どうしよう…逃げようか…。」

ヒソヒソと話していると、
レジ打ちの店員「チー」さんとやらが言った。

「もしかして…お金足りないとか…？」

ウベングルガと横田はコクコクと頷いた。

「困りましたねー…ちょっと店長呼んできます。」

そう言ってチーさんは奥へと引っ込んだ。
直ぐに店長が飛び出してきた。

「困りますよお客さん…」

そう言って出てきたのは10歳ぐらいの子供。

「食べた物は払ってもらわないと…ん？」

子供はウベングルガを見ている。

ウベングルガも子供を見て硬直している。

『あ—————！！』

二人の揃った声が店内に響き渡った。

「魔王様！？どうしてここに！？」

ウベングルガが慌てている。

「ここは俺の趣味の店だよ！！お前こそなんで！？」

魔王も慌てている。

そこに横田が割って入った。

「あのう…状況が掴めないんだけど…」

ウベングルガが振り返ると、コホンと一つ咳をした。

「紹介しよう。この方が我ら魔族の王。スンスケ様じゃ。」

：

沈黙の後、横田が叫んだ。

「ええええええええええええええええええええええ！？」

子供店長は魔王であつた。

第13話：子供魔王の野望（前書き）

ノースベルに訪れた横田一行。そこには魔王の存在が…？

「ままま魔王様！一体なにぎや目的ですか！？」

ちよつと台詞を嚙んでしまった。

魔王スンスケはキョトンとした表情で問いかける。

「目的？何の？店？」

横田は首を横に振り答えた。

「その…魔王様の目的ですよ！！例えば世界を支配するとか…」

魔王SNSukeは少し考えるとこう答えた。

「いや……ぶっちゃけノープランだけど？」

•
•
•

-
-
-
-
-
-

[illegible]

大声をあげたのはウベングルガであつた。

「ちょ…魔王様!! 魔王様がそんな事では困ります!!」

横田は頷きながら賛同した。

「そうだそうだ!! ノープランなら魔王なんて辞めてしまえ!!」

横田とウベングルガが交互に非難している。

魔王スンスケは目に涙を浮かべながら反論した。

「俺だって嫌だよ!! 魔王なんてさ!!」

「だってしょうがないだろ!? 魔王として召喚されたんだ!!」

『俺だって勇者が良かったよう!!! ばかぁ!!!』

周りの人々の視線が突き刺さる。

「ちょ…魔王様…わかったから泣かないで下さい…周りの目が…」

オロオロしている横田をしり目に、

ウベングルガが魔王を抱きしめて優しく微笑む。

「魔王様。泣かずともよいであろう? よしよし♪」

魔王スンスケはすすりながらも涙を止めた。

三人は場所を変え話すことにした。

―宿屋…横田の部屋

場所を宿へと移し、横田とウベングルガはそれぞれ椅子に腰をおろし、

魔王スンスケはベッドへと腰かけた。

「…で? どういうことなんだ? 魔王」

横田が強気になっている。

先程の泣く姿勢を見て、やはり子供であると認識したらしい。

魔王スンスケは事情を説明した。

「三か月くらい前かな？ 駅のトイレでさ。吸い込まれたと思ったらここに…。」

うんうん。と頷いていた横田だったが、駅のトイレがひっきりかき訪ねてみた。

「それってもしかして○○駅？」

コクリと魔王スンスケは小さく頷いた。

横田が召喚されたトイレと同じ駅だった。

「…何考えてんだか…ここのやつら…。」

横田のため息が、静かな部屋に響き渡った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4271h/>

大人勇者と子供魔王

2010年10月16日15時53分発行